資料

朝鮮戦争関係文献解題

——中国語文献——（二〇〇五～二〇一五年）

赤木完爾・安田　淳
服部隆行・李　錫敏

はしがき
一、一次資料
二、研究書・論文集
三、翻訳書
四、戦史・伝記・回想録（「紀実文学」、「傳記文学」、「報告文学」も含む）

はしがき

一九五〇年一〇月一九日夜、中国人民志願軍［以下、志願軍と略記］主力部隊は鴨緑江を渡河した。これより一九五三年七月の停戦協定まで、中国は朝鮮戦争に介入した。戦争全期間を通じて志願軍総兵力は延べ二九〇万名余りに達し、一九五三年春の最盛時にあっては一三五万名を数えることとなる。(1) 中国の朝鮮戦争介入の経緯とその後の戦争の展開については、冷戦終結後の一九九〇年代に至って、史料公開が一定程度進んだこともあり大きく進展した。ソ連との往来電報類は中国において公式な形で出版されている。(2) しかしながら、開戦経緯における中ソ関係の動態については、主として旧ソ連の史料に依拠するほかなく、中国側の思考と動向については、いまだに具体的な史料に基づく分析には困難がともなっている。たとえば参戦の条件をめぐるソ連との葛藤や中国共産党内部にあった参戦への消

極論は中国側の公式史料からは詳細な検討は難しい。数多くの研究者の注目を集めてきた参戦をめぐる党中央委員会内部の葛藤、毛沢東とスターリンとの交渉の機微については、史料批判をなした上で依拠できるハードエビデンスは中国側からは依然公開されておらず、合理的推論を積み重ねる以外に事態の解明は難しいのである。他方、軍事史家が向ける戦争への関心として、主として二つの領域がある。一つは志願軍の上級司令部や高級指揮官の戦域レベルにおける戦争の実践であり、[3] いま一つは個々の部隊や兵士の戦闘経験である。朝鮮戦争は、中国がはじめて経験した激烈な現代戦であった。それは今日までの中国の軍事的発展において、さまざまな形で影響を与え続けているといえよう。こうした問題領域については、記憶や回想によっても、相当に現実に接近することができるのである。

本稿は、前記の主題に対して必ずしも網羅的とはいえないけれども、関連する文献を幅広く収録したものである。

凡例

一、本稿においては、二〇〇五～二〇一五年初頭までに中国・台湾・香港で刊行された朝鮮戦争に関する書籍を発行年順に採録した。

二、本稿では中国の朝鮮戦争における戦史と停戦協議に関連する書籍（翻訳書は除く）に重点をおき、朝鮮戦争以前の中国・ソ連・北朝鮮の三者関係に関して言及している書籍や、朝鮮戦争当時、中国国内で行われていた「抗美援朝」運動などに関連する書籍については、一部を除き原則として掲載していない。

三、各書籍あるいは、シリーズごとに書誌情報などを含む簡単な解説を付した。

四、本稿では便宜的に「一、一次資料」、「二、研究書・論文集」、「三、翻訳書」、「四、戦史・伝記・回想録（「紀実文学」、「傳記文学」、「報告文学」も含む）」に分けて記載した。[4]

五、発行年がまたがる同一シリーズの書籍や、そのシリーズがまだ完結していない書籍に関しては、その初巻が発行された年次に掲載した。

六、【　】内は出版地を示している。出版地を掲記していないものはすべて中国発行の書籍である。

一、一次資料

●二〇〇五年

・周琇環（編）『戦後外交資料彙編――韓戦與反共義士篇』（國史館）【台湾】

「反共義士」とは、朝鮮戦争時、志願軍の兵士として参戦し、戦闘などで国連軍の捕虜になった中国人のうち、捕虜送還交渉において中国大陸への帰国を望まず、台湾への送還を希望した者のこと。彼らは巨済島の捕虜収容施設内において、中国大陸への送還を求める多くの中国人兵士と激しい対立を引き起こした。なおこの「反共義士」という用語はほぼ台湾のみで使用される呼称である。本書はこの「反共義士」を台湾に帰還させるために台湾が内部的あるいは、外交的に働きかけた、当時の文書をまとめたもので、本書を含めて二〇〇九年までに第三巻までが刊行されている。

●二〇〇六年

・鄭維山『鄭維山作戦筆記――従土地革命到抗美援朝』（解放軍出版社）

鄭は、朝鮮戦争当時第一九兵団の副司令員兼参謀長として志願軍を指揮した人物。本書の後半から彼が当時、一九兵団の各軍に行った講話や志願軍司令部に送達したと考えられる報告書などが付されている。

●二〇〇七年

・《陳賡軍事文選》（編輯組編）『陳賡軍事文選』（解放軍出版社）

陳は、一九五〇年九月のインドシナ戦争におけるホー・チ・ミン軍への作戦支援（「辺界戦役」）後、五一年三月より志願軍第三兵団の司令員として朝鮮戦争に参戦し、五二年四月から彭徳懐に代わり、一時的に代理の総司令員を務めた。本書には、彼の朝鮮戦争に関連する意見書や報告書が数点収録されている。

・中共河北省委党史研究室（編）『河北省抗美援朝運動』（中央文献出版社）

河北省での「抗美援朝」運動に関する資料が網羅的に収録されている。巻末には同省主要都市ならびに県レベルの「抗美援朝」運動の動向を綴った文章や関連年表も掲載されており、資料としての充実度が高い。

●二〇〇八年

・中共中央文献研究室・中央檔案館（編）『建国以来周恩来文稿』（三）（中央文献出版社）

中華人民共和国建国以降、周恩来が係わった電報・書簡・報告などを掲載した文書集。第三冊の収録範囲は一九五〇年七～一二月であり、初出の朝鮮戦争関係文書も多数含まれている。これまでに第三冊までが刊行されている。

●二〇〇九年

・《中国與蘇聯関係文献匯編》編委会（編）『中国與蘇聯関係文献匯編――一九四九年一〇月～一九五一年一二月』（世界知識出版社）

中国とロシアの国交六〇周年を記念して発刊された中ソ関係の文書を収録した資料集。文書は中国の檔案文書と旧ソ連檔案文書の両方が含まれる。朝鮮戦争の戦史に直接関係するものは掲載されていないが、同戦争をめぐる国連外交における中ソ間の認識の共有など、当時の中ソ両国の外交方針を窺う上では貴重な資料が多い。

・中共中央文献研究室・中国人民解放軍軍事科学院（編）『建国以来毛沢東軍事文稿』（上・中巻）（軍事科学出版社、中央文献出版社）

下巻を含めた三巻本。中華人民共和国の建国以来の毛沢東の電報・書簡・講話類の草稿や指示・訓示書面あるいはコメント書面などが時系列に掲載されている。上・中巻が朝鮮戦争時期にあたる。既刊の『建国以来毛沢東文稿』（中央文献出版社）、『毛沢東文集』（人民出版社）、『毛沢東軍事文集』（軍事科学出版社、中央文献出版社）に掲載され、初出ではない文書もあるが、初出の朝鮮戦争関連文書も数多く見られる。

●二〇一三年

・中央檔案館・中共中央文献研究室（編）『中共中央文件選集――一九四九年一〇月～一九六六年五月』三～一三巻（人民出版社）

全五〇巻。中国共産党中央委員会が発出した中央委員会各機関や地方委員会への指示文書などを中心に構成された文書集。ごくわずかであるが、朝鮮戦争関連文書も所収している。

・秦基偉『本色――秦基偉戦争日記（上・下）』（新華出版社）

一九五一年に第一五軍軍長として入朝し、第五次戦役や上甘嶺戦役を指揮した秦基偉の日記。一九三九年から一九五三年にわたるが（一部欠落）、朝鮮戦争に関係する部分は下巻の後半二百数十ページに及ぶ。戦闘の推移ばかりでなく部隊内に生じるさまざまな問題についても言及されている。

二、研究書・論文集

●二〇一一年

・齊徳学『你不了解的抗美援朝戦争』（遼寧人民出版社）

本書は朝鮮戦争の軍事史の研究者である齊が一九八〇年代から発表してきた論文をまとめたもの。朝鮮戦争の戦史に関する仔細な点にまで論究し、読み応えがあるが、議論の内容が経年により古くなっている点が悔やまれる。

・中華人民共和国国史学会（編）『抗美援朝――六〇年后的回眸』（当代中国出版社）

二〇一〇年一一月に中華人民共和国国史学会と中国軍事科学学会軍事歴史分会が開催した「中国人民志願軍抗美援朝出国六〇周年紀念」学術報告会での報告を基に組まれた研究報告集。徐焰、齊徳学、曲愛国など戦史研究者の論説が多い。

・張寧（主編）『抗美援朝――一九五〇年内蒙古紀事』（中共党史出版社）

一九五〇年に内モンゴルにおいて展開された「抗美援朝」運動に関して言及した研究書。興味深いのは、当地の満州里を経由してソ連からの軍事物資などを朝鮮前線にどのように運搬したのかなどの、兵站輸送業務に関する活動についても詳細に言及しているところである。ただし残念なことに、資料情報などについての明確な記載はない。

●二〇一二年

・沈志華『冷戦的起源』（九州出版社）

・沈志華『冷戦的轉型』（九州出版社）

・沈志華『冷戦在亜洲』（九州出版社）

・沈志華『冷戦中的盟友』（九州出版社）

沈がこれまで発表してきた冷戦史関係の論文を内容ごとに編集・分冊化した著作集。朝鮮戦争関係の論文は前記の各巻すべてに収録されている。またすべての巻末には、ほぼ沈によって公表済みの中国語訳旧ソ連資

料や中国外交部檔案館の資料も掲載されている。なお本著作集には『冷戦的再轉型』と題した、中ソ対立初期を取り扱った既発表論文集もあるが、こちらには朝鮮戦争関係の論文は所収されていない。

・牛軍『冷戦與中国外交的縁起――一九四九～一九五五』（社会科学文献出版社）

北京大学の牛軍による冷戦初期の中国外交と国際関係をめぐる研究書。朝鮮戦争に関する記述も最新の資料を用いた研究成果であり、外交面から見た朝鮮戦争研究の進歩への貢献は大きい。なお本書は二〇一三年に「修訂版」が発刊されているが、本書のどの部分に修正を加えたのかが注記がされておらず、その点が惜しまれる。(5)

・侯松壽『全能政治――抗美援朝運動中的社会動員』（中央文献出版社）

朝鮮戦争中の抗美援朝運動に関する研究書で、中国の研究者による同運動についての詳細な社会科学的研究であると思われる。必ずしも戦争動員として発動されたわけではない同運動が次第に社会動員のためのものとなり、その規模や範囲が拡大するとともに、戦争の推移と運動の動静が必ずしも一致しないことなどが、社会心理学や社会学の手法も応用されて分析される。引用文献も多岐にわたる。

・金祥波『朝鮮対外戦略史研究』（中国社会科学出版社）

一九四八年から二〇〇九年までの北朝鮮の対外戦略に関する研究書。そのうちの一節である「朝鮮戦争勃発前後におけるソ連、中国の援助を勝ち取る外交努力」において朝鮮戦争に言及している。さほど詳細な研究ではないが、この時期の北朝鮮の対外認識を概観する上では有用である。

●二〇一三年

・沈志華『朝鮮戦争再探――中蘇朝的合作與分岐』（三聯書店香港有限公司）【香港】

本書の「序」を書いたコーネル大学のチェン・ジェン（陳兼）は、朝鮮戦争研究上における本書の位置付けを、二〇〇三年に発刊（二〇〇七年は修訂版を刊行）した『毛沢東・斯大林與朝鮮戦争』（広東人民出版社）(6)の「全面修訂」版だとしている。記述においては、沈の従来の分析手法である旧ソ連資料に基本的に依拠しつつ(7)、当時の中ソ関係のあり方から朝鮮戦争を分析するという方法に大きな変化はない。ただ本書ではそれ

のみならず、ことに中国の朝鮮戦争への参戦決定過程の分析においては、当時の中国側関係者への聞取り調査やその回想録などにも依拠し、論を進めている。しかし脚注や参考文献あるいは、これまでの沈の著作の特徴といってもよい中国語訳旧ソ連資料の掲載がなく、その意味では資料性に乏しい構成となっている。

・沈志華『無奈的選択・冷戦與中蘇同盟的命運――一九四五～一九五九』上下巻（社会科学文献出版社）

沈の一九五〇年代末までの中ソ関係について綴った研究書。全一〇章のうち一章が朝鮮戦争の記述に充てられている。脚注や参考文献一覧などはあるが、中国語訳旧ソ連資料は掲載されていない。

・邵志勇『抗美援朝分水嶺――砥平里戦記』（人民出版社）

中国の朝鮮戦争の戦史研究において、これまで第四次戦役の詳細な研究は「タブー視」されていたが、同戦役における西部・中部戦線（楊平・原州・横城）砥平里地区での戦闘について仔細に分析した書籍。本書の序を記した劉慶は志願軍の砥平里での敗北を「志願軍が入朝作戦後に遭遇した初めての極めて重い敗退」であったと述べる。

・沈幸儀『一萬四千個證人――韓戦時期「反共義士」之研究』（国史館）【台湾】

台湾で「反共義士」といわれる元中国人参戦兵士について、その参戦から、捕虜収容所での「反共闘争」ならびに、台湾帰還後動向まで、つぶさに調査した研究書。台湾にある中華民国外交部資料なども丁寧に調査・分析しており、資料が充実している。

・楊昭全・孫艶姝『当代中朝中韓関係史（上・下）』（吉林文史出版社）

一九四九年から二〇〇七年までの中朝中韓関係通史。中朝関係に関しては、これを七期に分けているが、その第一期を「政治同盟、軍事合作」の時期として、主として朝鮮戦争勃発の遠因から志願軍の参戦、そして一九五八年の撤兵までが叙述される。停戦交渉についても比較的詳述されているが、その論拠はほぼ既存の研究や公式戦史である。

●二〇一四年

・宋暁芹『隠於幕後――蘇聯與朝鮮戦争』（社会科学文献出版社）

沈志華の協力の下で、中国語および英語の文献を用いて朝鮮戦争とソ連との関係をまとめたもの。戦争の勃

発、中国の参戦、空軍力支援、停戦交渉等にそれぞれソ連がどのように関与したのかが検討される。ソ連の果たした役割や作用を詳細に分析しており有用であるが、相対的に中国の戦略的企図やその主体性が過小に評価されているように思われる。

・徐焰『徐焰講稿自選集』（国防大学出版社）

中国国防大学の著名な研究者がその教育課程や学術報告で述べたものを集めた「国防大学名師論壇叢書」の一冊で、中国軍事史や冷戦史についての著名な研究者である同大学の徐焰の自選著述集。抗日戦争から今日の中国人民解放軍まで幅広く言及する。そのうち、「抗美援朝戦争の疑問と分析」の章ではこれまでの著者の研究がまとめられている。中国の参戦は米国との対決を意図したものであったこと、戦争の過程でその目標に変化が生じたこと、その後の人民解放軍近代化の飛躍的発展に大きく寄与したことなど、中国における朝鮮戦争研究としてはユニークな指摘がみられる。

三、翻訳書

●二〇〇六年

・艾沢曼（陳昱澍訳）『美国人眼中的朝鮮戦争』（当代中国出版社）

マウリス・イッサーマンの著作の中国語版［Maurice Isserman, *America at War: Korean War* (New York: Facts On File, 2004)］。

●二〇〇七年

・約翰・托蘭（孟慶龍等訳）『漫長的戦闘——美国人眼中的朝鮮戦争』（中国社会科学出版社）

ジョン・トーランドの著作の中国語版［John Toland, *In Mortal Combat Korea, 1950-1953* (New York: William Morrow, 1991)］。

●二〇〇八年

・昆明市社会科学院（編）（龍東林・朴八先訳）『李範奭将軍回憶録』（雲南人民出版社）

李範奭『鐵驥李範奭自伝——ウドゥンブル』（ソウル、

思想社、一九七一年、三育出版社、一九七八年）の中国語版[8]。

●二〇一〇年

・哈伯斯垢姆（王祖寧等訳）『最寒的冬天』（重慶出版社）
デイヴィッド・ハルバースタムの著作の中国語版［David Halberstam, *The Coldest Winter: America and the Korean War* (New York: Hyperion Books, 2007). 山田耕介・山田侑平訳『ザ・コールデスト・ウィンター――朝鮮戦争』全二冊（文藝春秋、二〇〇九年）］。

●二〇一二年

・亜歴山大（郭維敬・劉榜離等訳）『朝鮮――我們第一次敗戦』（新星出版社）
ベヴィン・アレキサンダーの著作の中国語版［Bevin Alexander, *Korea: The First War We Lost* (New York: Hippocrene Books, 1986)］。

●二〇一三年

・布魯斯・康明思（林添貴訳）『朝鮮戦争――你以為已経遺忘、其実従不曾了解的一段歴史』（左岸文化事業有限公司、二〇一三年）【台湾】
ブルース・カミングスの著作の中国語版［Bruce Cumings, *The Korean War: A History* (New York: Modern Library, 2010)、栗原泉、山岡由美訳『朝鮮戦争論――忘れられたジェノサイド』（明石書店、二〇一四年）］。

・梅哈福尓（羅丁紫・許志強・馬春霞訳）『従西点軍校到鴨緑江』（世界図書出版北京公司）
ハリー・J・メイルハーファーの著作の中国語版［Harry J. Mailhafer, *From the Hudson to the Yalu: West Point '49 in the Korean War* (College Station: Texas A&M University Press, 1993)］。

四、戦史・伝記・回想録（「紀実文学」、「傳記文学」、「報告文学」も含む）

●二〇〇五年

・楚雲『朝鮮戦争内幕全公開』（時事出版社）
朝鮮戦争の全過程を詳細に叙述しているが、「内幕全公開」という表題が付されているにもかかわらず、資料が明示されていないため、その信憑性は高いとはい

いがたい。

・董保存『百戦戦将――楊成武』（解放軍文芸出版社）
第二〇兵団を率いて一九五一年六月に朝鮮戦争に参戦した楊の伝記。全二三章のうち、四章が朝鮮戦争の記述に割かれている。

・祝継光『戦俘奥運会紀実』（解放軍出版社）
祝は一九五二年四月に志願軍政治部捕虜収容所宣教幹事として朝鮮戦争に関わった人物。本書は祝が担当していた碧潼捕虜収容所で一九五二年一一月一五～二六日に開催された大規模な運動会を「オリンピック」と称して行った経過が詳細に書かれており、非常に稀有な記録である。

●二〇〇六年

・向守志『向守志回憶録』（解放軍出版社）
第一五軍第四四師団の師団長（後に第一五軍参謀長）として、第五次戦役より朝鮮戦争に参戦した向の回想録。朝鮮戦争に関する回想は全一八章中、一章分しかないが、第五次戦役より停戦協定調印時期までの同軍の戦闘活動が比較的詳細に描かれている。

・武立金『毛岸英在朝鮮戦場』（作家出版社）
「紀実文学」作品。一九五〇年一二月二四日の国連軍の「クリスマス攻勢」において、アメリカ空軍による志願軍司令部への爆撃を受けて死亡した毛沢東の実子、毛岸英の朝鮮戦争参戦への経緯を綴った伝記。

・李庄・李東東『李庄朝鮮戦地日記』（寧夏人民出版社）
人民日報社の従軍記者であった李庄が朝鮮戦場で書いた日記。一九五〇年一二月一日から五一年三月一〇日までのうち、七七日分の日記が掲載されている。本書は、見開き左ページに李庄が自身で書いた日記の写真版が、右ページに活字化した日記が掲載されており、こうした構成が同日記の資料の証拠能力性を高めている。

・黄茵・黄谷柳『黄谷柳朝鮮戦争戦地写真』（嶺南美術出版社）
作家の黄谷柳が朝鮮へ慰問団の一員として、朝鮮戦場を訪れた際に残した写真と日記ならびに、報告文などで構成されている。黄茵は黄柳谷の孫にあたる。

・宋国東『志願軍十虎将』（中央党史出版社）
朝鮮戦争で戦った志願軍の一〇人の軍人の活躍を描いたもの。志願軍副司令員洪学智、空軍司令員聶鳳智、第二〇軍軍長張翼翔、第二七軍軍長彭徳清、第三九軍

軍長呉信泉、第四〇軍軍長温玉成、第四二軍軍長呉瑞林、第六〇軍軍長張祖諒、第六三軍軍長傅崇碧、第六六軍軍長蕭新槐を採り上げている。

・楊斯徳『歴史使命――共和国将軍楊斯徳回憶録』（華芸出版社）

著者は一九五二年に中国空軍第二一師団の副政治委員となった人物。朝鮮戦争に関しては、回想録的な記述は多くなく、捕虜問題に関する比較的一般的な記述のみにとどまっている。

・劉慶涛『開国上将――李涛』（解放軍文芸出版社）

李は中央人民政府人民革命軍事委員会の作戦部で朝鮮戦争の勃発から志願軍の参戦まで、北朝鮮軍の戦況や国連軍の仁川上陸の可能性の分析など、志願軍の参戦に資する情勢判断を中国指導層に報告・提案した人物。李は中国の朝鮮戦争参戦に大きな役割を担っていた人物であるにもかかわらず、彼に関する伝記は少なく、その意味で貴重な一冊といえる。

・安克峻・李瑶（編著）『抗美援朝中的山東人』（山東人民出版社）

朝鮮戦争に参戦した山東省出身の兵士の戦地での活躍と、当地の人々がどのような前線支援を行ったかを綴った書籍。巻末には山東省出身の兵士の詳細な経歴が収録されている。

・王波『毛沢東的艱難決策㈠中国人民志願軍出兵朝鮮的決策過程』（中国社会科学出版社）

二〇〇二年に出版された同書の再版。軍人である筆者が参戦経験者等に取材して執筆した「報告文学」である。「文献及び史料」としての価値を有するとされ、また再版付録として三編の評論が掲載されているが、いずれも参戦の決定と中国人民志願軍の活躍を称揚したものであり、従来の中国側の見解を超えるものではない。

●二〇〇七年

・鄭時文『我心有歌――一個学生兵的朝鮮戦場親歴記』（世界知識出版社）

「紀実文学」作品。鄭は一九五〇年に中国人民解放軍第二野戦軍軍政大学に入学すると、五一年三月には第一五軍第二九師団の工作要員として朝鮮戦争に参戦し、以後五七年八月まで朝鮮戦場にとどまった人物。本書は鄭が経験した朝鮮戦争に関しての随筆集的な側面が強いが、「上甘嶺戦役」などについては比較的詳細な

回想録となっている。

・武宏『軍旅生涯』（中国文史出版社）

武は第六五軍第一九四師団第五八〇連隊に所属し、一九五一年二月に朝鮮戦場に赴き、第五次戦役から朝鮮での戦闘を経験する。五二年一二月に第一九四師団副師団長に昇進し、五三年九月に中国に帰還した。朝鮮戦争に関する記述は本書の一部分であるが、内容は詳細である。

・《陳賡傳》編写組『陳賡傳』（当代中国出版社）

当代中国出版社がシリーズで刊行している中国軍将領伝の一冊。本書では朝鮮戦争に関する記述は少ないが、一九五二年四月に病気治療のため中国に帰還した彭徳懐に代わり、以後、同年六月に鄧華が正式に代理総司令員になるまで、陳が事実上の総司令員を代行したことの経緯などにも触れている。

・陸有徳『我的軍旅生涯』（私家版）

陸は一九五一年に大学卒業後、中央人民政府人民革命軍事委員会通信部技術處に入り、五二年三月から五三年八月までの間、通信技術要員として四度にわたり朝鮮戦場に赴いた。本書は私家版ながら、朝鮮戦争期の中国の通信技術の実態を知る上でも貴重な回想録である。

・周明『韓戦――抗美援朝』（知兵堂）【台湾】

本書は朝鮮戦争において軍事的な関心が高い話題に特化した、いわゆる「ミリタリー系」の書籍。だがその半分近いページ数を、第二次戦役の東部戦線における長津湖地区での戦いに関する一章とし、その末尾には朝鮮戦争当時、第二〇軍第五八師団第一七四連隊三大隊に所属し、長津湖地区の戦いに参戦した著者の父（姓名不詳）の回想記を掲載している。

・粛邦振（等編著）『飛殲空中敵――尋訪空軍飛行員戦闘英雄』（解放軍出版社）

本書は朝鮮戦争時に米空軍との空中戦により、米軍機に大きな打撃を加えたことで、後に「戦闘英雄」の称号を与えられた中国空軍の元パイロットを訪ね、当時の空中戦の様子を聞き取りまとめたもの。

・呉清麗・王計昌『出奇制勝――軍事院校詳解人民軍隊実戦案例　抗美援朝巻』（上海人民出版社）

本書は中国参戦以後の五次までの戦役と「上甘嶺戦役」、「金城戦役」について軍事作戦面から検討した概説書。

・胡海波『雲山大碰撞――第一次戦役戦時報告』（軍事科

学出版社）

・胡海波『亮剣長津湖――第二次戦役戦時報告』

・殷力『漢城争奪戦――第三次戦役戦時報告』

・趙建利『横城大反撃――第四次戦役戦時報告』

・趙建利・梁有江『烽火三八戦――第五次戦役戦時報告』

・林勇『漢江拉鋸戦――一九五一年夏秋防御戦役戦時報告』

・林勇・殷力『浴血上甘嶺――上甘嶺防御戦役戦時報告』

・林勇・殷力『金城唱絶响――一九五三年夏季反撃戦戦役戦時報告』

以上八冊は軍事科学出版社より、「遠東朝鮮戦争経典戦役」として刊行されたシリーズである。各巻大冊で、参考文献は省かれているものの、各巻随所に地図や写真が配置されて、資料性に富む。

●二〇〇八年

・欒克超『血與火的較量――抗美援朝紀実』（華芸出版社）

「紀実文学」作品であるが、中国および、中国語に翻訳された旧ソ連の資料なども用いて志願軍参戦以来の朝鮮戦争の全過程が叙述されている。本書の著書紹介欄には、著者の欒が志願軍の兵団部参謀として朝鮮戦争に参戦していたと述べているが、本書には欒のそうした参戦体験がほとんど書かれていない。

・昆嶺『父親杜平――紀念杜平将軍誕辰一百年』（上海文芸出版社）

志願軍の政治部主任として朝鮮戦争に参戦した杜の娘、昆嶺が父の生誕一〇〇周年を記念して、杜の遺した文字資料や写真などを参考に、軍人としての父の在りし日々を綴ったもの。全六章のうち一章が朝鮮戦争に関する記述である。

・郭維敬『板門店談判見証録』（大象出版社）

著者の郭は朝鮮戦争当時、国連軍捕虜の収容施設の管理や志願軍の政治部にいた人物。本書は停戦協議が開城から板門店に移って以降の交渉の状況や捕虜問題を中心に扱っているが、郭自身の回想的な記述は少ない。

・魯杰『彭徳懐兵法與謀略』（四川人民出版社）

志願軍総司令員の彭徳懐が生涯において戦ってきた戦闘のなかから彼の軍事指導者としての力量を分析したもの。朝鮮戦争については、その戦闘の局面における彼の軍事指導の実態に応じて各章にちりばめられている。巻末には参考文献一覧もある。

・楊冠群『熱戦中的冷戦――板門店停戦談判』（世界知識

出版社）

二〇〇四年一月に対外開放された中国外交部の外交檔案館に所蔵されている資料などを用いて、板門店での交渉やそれにまつわる関心を記したもの。しかし、脚注ならびに参考文献や檔案資料番号に関する記述は一切なく、資料性は高くない。なお著者の楊は自身が板門店での停戦交渉の全過程に「工作人員」として携わったと述べている。

・李慶山『志願軍援朝紀実』（中共党史出版社）

「紀実文学」作品。五〇〇ページを超える大冊で朝鮮戦争全体を概観した書。巻末に参考文献が付されているが、内容的にはそれほど目新しいものはない。

・李峰『決戦朝鮮』（長江文芸出版社）

「紀実文学」作品。第二次大戦終結直前の東アジアをめぐる国際情勢から朝鮮戦争終結までが概説的に描かれている。巻末には地図や参考文献も記載されているが、中国側が主張する朝鮮戦争における「細菌戦」に、日本人が関わっていたなどの論拠に乏しい記述もある。

・鄭凱梅『美国兵眼中的戦争――従二戦、朝戦到越戦』（新華出版社）

「紀実文学」作品。著者の鄭は在米華人作家。本書は第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争に参戦した元米軍兵士を訪ね、戦争体験をインタヴューしてまとめたもの。

・羅胸懐『中美空中較量』（人民出版社）

朝鮮戦争からベトナム戦争までの米中間における航空戦の実態を綴ったもの。三部構成のうち、一部が朝鮮戦争におけるそれに充てられている。巻末には参考文献一覧と、中国空軍が米軍機を撃墜し、あるいは損傷を負わせた記録の一覧が掲げられている。

・南寧市政協文史学習委員会（編）『南寧文史資料第二六輯　抗美援朝専輯』（出版社記載なし）

広西壮族自治区の南寧市が当地の歴史の宣伝・普及・教育を目的に刊行している「文史資料」の特集として編纂された書籍。朝鮮戦争当時、南寧市の「抗美援朝」運動に関係した人々の回想や、南寧市から志願軍に参加し、朝鮮戦争で戦った人物による回想がおよそ一〇〇編ほど掲載されている。その他、朝鮮戦争で使用された兵士の生活用品の写真や、南寧市から参戦した兵士の所属時期、所属した部隊に関する資料も収録されている。

●二〇〇九年

・朱奎玉『陳賡大将画傳』（四川人民出版社）

「中国人民解放軍大将画傳」シリーズの一冊。朝鮮戦争に関する記述は少ないが、朝鮮戦争当時の陳の写真が数多く掲載されている。

・梁原『梁原回憶録』（解放軍出版社）

梁は朝鮮戦争当時、第四七軍第一三九師団と第一四〇師団の師団長を歴任した人物。一九五一年四月に朝鮮戦争に参戦し、一九五四年九月に中国に帰還した。本書は梁の軍人としての回想録であるが、朝鮮戦争に関する分量は比較的多く、内容も充実している。

・彭梅魁『我的伯父彭德懐』（中央文献出版社）

彭の甥である彭梅魁による著作。甥の視点からみた彭德懐像を考察したもの。分量的には多くないが、朝鮮戦争中の彭德懐を独自の視点で分析した箇所がある。

・王亜志（回憶）、沈志華・李丹慧（整理）『彭德懐軍事参謀的回憶――一九五〇年代中蘇軍事関係見証』（復旦大学出版社）

王は志願軍司令部において彭德懐の軍事面での参謀であった人物。本書はその王の回想に基づき、朝鮮戦争期を含めた一九五〇年代の中ソの軍事協力関係を検証する内容であり、朝鮮戦争期における中国陸軍の武器の近代化や中国空軍、海軍建設へのソ連の軍事協力の実態を具体的に知ることができる。なお本書は「批判口述史学（Critical Oral History）」という立場から、王の回想を、沈と李の二人の学者が批判的に検証しながら、歴史事実を認定していくという形式で分析・検討を進めている。ただし王の回想の信憑性や、二人の学者がどのような資料に基づいて王の回想を検証したのかを、脚注や参考文献において明示しておらず、その意味で「批判口述史学」に成功しているとはいいがたい。

・胡海波『一九五〇～一九五三年朝鮮戦争備忘録』（黄河出版社）

朝鮮戦争の戦闘を中心とした全過程を、数多くの写真や地図などを配置し解説している。

・葉永烈『解密朝鮮』（新東方出版有限公司）【香港】

本書は著者の葉の北朝鮮訪問記であり、朝鮮戦争の専門書ではないが、第四章に朝鮮戦争に関する記述がある。ここには旧ソ連資料を利用したと思われる（ただし、資料が明示されていない）北朝鮮の南進攻撃決定過程に関する記述があり、興味深い。

・楊鳳安・孟照輝・王天成『我們見証真相――抗美援朝親歴者如是説』（解放軍出版社）
朝鮮戦争当時、彭徳懐の軍事秘書であった楊を中心として、志願軍司令部の幹部として参戦した人物などが、朝鮮戦争に関する史実や問題点に答える形式で構成された論説集。

・彭徳懐傳記組『彭徳懐全傳』（中国大百科全書出版社）
全四巻。総一七〇〇ページを超える彭徳懐の伝記。第三巻が朝鮮戦争期にあたる。巻末には一九五九年の廬山会議において「右派」のレッテルを貼られた彭徳懐の名誉回復に関する記事や詳細な年譜もあるが、参考文献一覧の記載がない。

・《遅浩田傳》写作組『遅浩田傳』（解放軍出版社）
一九九三年に国防部長となった遅の伝記。朝鮮戦争当時、遅は第二七軍第七九師団第二三五連隊三大隊の副政治指導員として第一次戦役から参戦し、一九五二年一〇月まで朝鮮戦場で戦った。

●二〇一〇年

・何雲庵（主編）『当祖国召喚的時候――交大（唐院）抗美援朝工程兵紀実』（西南交通大学出版社）
朝鮮戦争当時、西南交通大学から工程兵として参戦し、主として朝鮮各地の飛行場の再建にあたった記録が綴られている。

・《丹心向陽》編委会『丹心向陽――梁原将軍紀念文集』（中央文献出版社）
梁は朝鮮戦争当時、第四七軍第一三九師団と第一四〇師団の師団長を歴任した人物。本書は二〇〇八年に亡くなった梁への追悼文集。

・陳徹『旋風部隊――第四〇軍朝鮮戦争傳奇』（新華出版社）
「紀実文学」作品であるが、著書の陳徹による第四〇軍関係者に対する聞取りなどにより、志願軍の第一陣として参戦し、停戦交渉の締結まで朝鮮戦場に残った同軍の戦闘の実態を克明に記述している。

・李英ほか『四十軍在朝鮮』（遼寧人民出版社）
参戦当初から入朝し朝鮮戦争のほぼ全過程を戦った第四〇軍の活躍ぶりを描いた「紀実文学」作品で、一九九五年に出版されたが、関係者の多くがこの世を去りつつある今日において、改めてその功績をたたえるために新装再版された。朝鮮戦争研究者の齋徳学や、彭徳懐の軍事秘書であった楊鳳安等のほか、第四〇集団

軍軍史辦公室も協力している。シリーズとして『三十八軍在朝鮮』『三十九軍在朝鮮』も出版されている。

・董大軍『朝鮮戦争解密』（明鏡出版社）【香港】

中国や旧ソ連の朝鮮戦争関係資料の公開を受けて、それ以前の朝鮮戦争に対する認識がどう変化したのかを、さまざまな戦史にまつわるテーマを挙げて叙述している。本書の特徴は、こうした問題を時事的かつ、学術上の議論として受け止めているだけではなく、インターネット上で繰り広げられている朝鮮戦争に関する議論も積極的に受け入れて問題関心を深めている手法にある。そうした面では従来にはなかった異色の切り口を有している。

・王耀南『王耀南回憶録』（中央党校出版社）

王は中国軍に入隊以来、一貫して工兵として活動し、抗日戦争時期より八路軍において戦場となる地域の専門的調査業務に携わった人物。朝鮮戦争への従軍経験はなく、本回想も解放戦争時期で終わっている。ただし朝鮮戦争中に、数度にわたり工兵・砲兵・通信兵部門の幹部を率いて同戦場における防御戦の調査業務を行っており、その際に記した日記が一部分と断った上で、まとめて掲載されている。その時期は一九五二年八月初めから一一月末までである。

・袁永生（主編）『抗美援朝珍蔵図片集』（四川大学出版社）

朝鮮戦争当時に撮影した貴重な写真を集めた写真集。朝鮮戦争に参戦した指揮官の写真ばかりでなく、一般兵士からも所有していた写真を集め、各人ごとにページを割いているところに特徴がある。どの写真も一瞥しただけで貴重な写真であることがわかる。

・石暁華（主編）『永恒的懐念——抗美援朝六〇周年回憶録』（上海三聯書店）

全六六〇ページにも及ぶ大冊の朝鮮戦争に関する回想録集。主として上海地区から朝鮮戦争に参戦した兵士や、兵站輸送ならびに野戦病院などで活動した人々によって綴られている。

・袁永生（主編）『志願軍老兵回憶録』（四川大学出版社）

四川省国防教育委員会と国防時報社が「中国人民志願軍抗美援朝六〇周年」を記念して発刊したとある。全編にわたり、多数の朝鮮戦争に参戦した兵士の回想が収録されており、各人の回想には当時の所属部隊における職名も記載されている。二〇一三年に出版された同名の四巻本はさらに多くの回想が収録されている。

・王天成『麥克阿瑟與朝鮮戦争』（解放軍出版社）
「紀実文学」作品。マッカーサーが朝鮮戦争において米軍をどのように指揮したのかについて述べられているだけでなく、一九五一年四月の国連軍司令官解任後以降の朝鮮戦争への関わりについての言及もある。著書の王は朝鮮戦争当時、志願軍司令部の情報参謀。

・余瑋・呉志菲『我們跨過鴨緑江――抗美援朝戦争親歴者人生傳奇実録』（中央党校出版社）
朝鮮戦争に参戦した志願軍関係者への聞取り調査をまとめたもの。本書には停戦交渉代表団秘書長の柴成文、志願軍副司令員の洪学智への聞取りも含まれている。

・穆欣『陳賡傳』（人民出版社）
全編七〇〇ページを超える陳の伝記。ただし陳の朝鮮戦争における活動についての記述は少なく、インドシナ戦争でのベトナム軍への支援活動とともに、一つの章にまとめられている。抗日戦争や解放戦争期における陳の軍人としての活躍ぶりが詳細に綴られている。

・陳輝亭・陳雷『抗美援朝防空作戦実録』（解放軍文芸出版社）
「紀実文学」作品。朝鮮戦争に参戦した志願軍の軍種のなかで最も近代化を遂げたといえる防空軍の作戦史。「紀実文学」作品ではあるが、巻末には参考文献が掲載されており、また本文前半の脚注には外部では知ることができない、中国空軍司令部檔案館に所蔵されている資料からの引用が明示され、なかにはその資料の全文引用箇所もある。なお著者の一人、陳輝亭は一九五二年四月に高射砲部隊で朝鮮戦争に参戦している。

・丁偉『難忘一九五〇――中国人民志願軍作戦図文実録』（新華出版社）
朝鮮戦争の全過程を写真と解説で綴った概説書。写真や図版は新華社通信が所蔵しているものを利用している。著者の丁偉は軍事科学院軍事歴史研究所の研究員。

・劉峥『朝鮮・一九五〇』（人民出版社）
中国の朝鮮戦争への参戦決定過程を中心に、一九五〇年の中国の朝鮮戦争をめぐる動向に焦点を絞り叙述している。巻末には多くはないが参考文献を挙げている。

・姜廷玉（主編）『解読抗美援朝戦争』（解放軍出版社）
朝鮮戦争に関するさまざまな疑問に個別に答える形式で綴られている。朝鮮半島を南北に分断する北緯三八度線の設定の由来から、中国人民革命軍事博物館に所蔵・展示されている朝鮮戦争時に使用された文物まで幅広く解説がなされている。

・丁偉『従鴨緑江到三八線』（解放軍出版社）
朝鮮戦争の戦闘の経過を中心に書かれた概説書。
・胡海波『志願軍全戦事』（長城出版社）
約五〇〇ページにも及ぶ朝鮮戦争の戦史。写真や地図が多く掲載されている。
・尤秀斌・祁祥華『第一狙撃手』（河北人民出版社）
「紀実文学」作品。一九五二年九月に第二四軍第七二師団第二一四連隊所属の狙撃手として参戦し、「上甘嶺戦役」での勲功で「狙撃英雄」と称された張桃方の戦場での活躍を綴った作品。巻末には朝鮮戦争当時、志願軍やアメリカ軍が使用していた銃器の解説もなされている。
・本書編委会『「三八線」上的交鋒——抗美援朝戦争紀実』（解放軍文芸出版社）
「紀実文学」作品。朝鮮戦争の勃発から停戦協議締結までを取り扱った、五〇〇ページ以上にも及ぶ大著である。本書の編集委員会のうち、数名が朝鮮戦争の参戦経験があるが、記述内容にはさほど新しいものはない。巻末には簡単な文献目録が掲載されている。
・李慶山『向志願軍学習』（華夏出版社）
志願軍の朝鮮戦場における戦史というより、志願軍の「愛国主義」、「国際主義」の観点から朝鮮戦場で得た経験や逸話を「学ぶ」ことを勧める啓蒙書。

●二〇一一年

・西虹『抗美援朝戦地日記』上下（長征出版社）
著者の西は一九五二年三月から一〇月末まで、作家の巴金を代表とする文学者の戦地視察団の一員として朝鮮半島に入った。本書はその期間に西が記した日記を公開したもの。当時、中国側が非難していた国連軍の「細菌戦」に関する記述や、捕虜収容所を訪問した記録などが綴られている。
・景希珍・丁隆炎『在彭徳懐身辺』（広東人民出版社）
景は中国の朝鮮戦争参戦以来、志願軍司令部にて彭の警備参謀を担当し、以後、一七年間にわたり彼に仕えた人物。本書の朝鮮戦争に関する記述は、景の口述を丁がまとめたもの。
・何宗光『那年、那月、鴨緑江那辺的記憶』（長征出版社）
何は一八歳の時に、第三九軍第一一六師団三四六連隊の兵士として一九五〇年一〇月二一日に朝鮮戦場に入り、五二年一〇月の「秋季戦術反撃戦」まで戦闘に参加。その間連隊文化教員や中隊長を歴任した。本書は

出撃した各戦闘の模様を追憶するだけでなく、戦友との思い出、戦地での生活、戦地慰問団や慰問袋に接した時の喜びなども綴られている。

・魏白『志願軍戦将傳奇』（長城出版社）

朝鮮戦争に参戦した各軍の司令員（軍長）の戦闘での活躍を記した伝記。第二〇軍軍長の張翼翔、第二七軍軍長の彭徳清、第六三軍軍長の傳崇碧などあまり詳細が知られていない人物にスポットが当てられている。

・逯守標『従書生到虎将――韋統泰将軍』（解放軍文芸出版社）

「傳記文学」作品。韋統泰は一九五二年末、第二〇兵団第五四軍第一三五師団の師団長として朝鮮戦争に参戦した人物であるが、この時期、韋自身は病気治療のため中国国内にとどまっており、事実上、師団長が不在のまま、第一三五師団は朝鮮戦場で戦った。韋が第一三五師団に復帰するのは、停戦協定締結後の五三年一一月以降で、まだ朝鮮半島にとどまっていた第一三五師団にこの時期に合流した。その後、韋の復帰した第一三五師団は、五八年七月まで朝鮮にとどまり、そのため本伝記の朝鮮戦争に関する記述は停戦後の朝鮮半島情勢に関する大半を占める。なお韋自身は五〇年末の広西での「剿匪」作戦、一九五九年のチベット動乱、一九六二年の中印国境紛争にも参軍しており、五〇～六〇年代初頭の中国国境をめぐるさまざまな紛争に関わっている点からも本書は見所が多い。

・薩蘇『鉄在燒――中国人民志願軍鉄原大戦実録』（文匯出版社）

「紀実文学」作品。第五次戦役における鉄原地区での攻防戦について描いたもの。著者は第五次戦役で国連軍に鉄原を奪取されていたら志願軍の同戦役における全戦線は壊滅していたとして、その攻防戦の重要性を指摘する。なお著者の父である蔡長元は第六三軍第一八九師団の師団長として鉄原地区での攻防戦で作戦指揮を執った。

・解海南・楊祖発・楊建華『楊得志一生』（中共党史出版社）

楊得志は一九五一年二月、第一九兵団の司令員として朝鮮戦争に参戦し、第五次戦役、停戦協議開始後の「夏秋防御作戦」の指揮を執った後、五二年に志願軍司令部第二副司令員となった人物。本書はその楊の伝記で、一九兵団や志願軍司令部の内部の状況が詳述されている。

・李敏生『霹英東與抗美援朝戦争』（解放軍出版社）
朝鮮戦争勃発後、国際的な中国への戦略物資等禁輸政策のなかで、強力な海上封鎖を凌ぎ、マカオ、香港などを通じて中国国内に物資を送り続けた霹英東のこの時期の活動について仔細に綴った伝記。

・周克玉『一位抗美援朝親歴者的戦地日記』（作家出版社）
「紀実文学」作品。周は一九五二年八月に第二四軍の幹部部（行政管理部門）の幹部として朝鮮戦争に参戦。本書はそれ以後、同年一〇月一日から五三年一二月までの日記。

・張沢石・高延賽『孤島――抗美援朝志願軍戦俘在台湾』（金城出版社）
停戦交渉における捕虜送還問題をめぐり、捕虜収容施設で生じた台湾への送還を求める兵士の「暴動」の実態を克明に著述しただけでなく、台湾に送還された兵士のその後の台湾における生活に至るまで、詳細な取材を通じて描いた「紀実文学」作品。著書の張沢石は、第六〇軍第一八〇師団の兵士として参戦し、第五次戦役で負傷して捕虜となり、その後、志願軍捕虜収容施設内で通訳などを担った人物。

・田芸（編）『我的一九五〇年代――朝鮮戦場親歴記』（長江文芸出版社）

・崔露（編著）『我的一九五〇年代――上甘嶺親歴記』（長江文芸出版社）
「我的一九五〇年代」シリーズの二冊。前者は朝鮮戦争参戦者の回想録。後者は「上甘嶺戦役」で戦った第一五軍第四五師団の師団長崔建功の孫である著者が、この戦役に関する将兵の証言を集めまとめたもの。

●二〇一二年

・楊江華（主編）『志願軍的故事』（湖南科学技術出版社）
「百部少年愛国主義教育読本」シリーズとして編纂されたなかの一冊。

・武立金『毛岸英最后三十四天実録』（台海出版社）
武は二〇〇六年にも『毛岸英在朝鮮戦場』という本を出版しており、扱っている内容はほぼ同じ。

●二〇一三年

・張大華（主編）『我在朝鮮戦場』（新華出版社）
朝鮮戦争停戦六〇周年に際して、浙江省磐安県の檔案局が二年余りにわたり、当地に居住する八三人の朝鮮戦争に参戦した人物の同戦争に関する口述記録をまと

めたもの。

・程幹遠『親歴韓戦――中国軍人回憶録』（明鏡出版社）【香港】

著者の程は、一五歳の一九五一年八月、志願軍砲兵第七師団の兵站自動車輸送中隊の一員として朝鮮戦争に参戦し、以後五三年九月に中国に帰国するまで、「上甘嶺戦役」や「春季金城反撃戦」などに出撃した経験をもつ。本書の執筆当時は、中国を離れカリフォルニア州に移り住んでいる。本書は程による朝鮮戦争の従軍経験についての回想録である。中国国内の朝鮮戦争研究者が、中国政府の朝鮮戦争についての公式見解を踏襲するばかりで、「歴史の真相」を伝えていないという批判的な観点から本書を著述しており、その意味で一読の価値は高いが、資料性はそれほど高くない。

・袁永生・沈鶴翔（編）『志願軍老兵回憶録』（四川大学出版社）

全四巻。二〇一〇年発刊された同名のものの続編的な内容であるが、資料・死傷者数統計表・志願軍組織図なども掲載されている。なお一部の回想は二〇一〇年の一巻本と同じ回想が掲載されている。

・袁永生・沈鶴翔（編）『抗美援朝珍蔵図片集、続』（四川大学出版社）

二〇一〇年に刊行された同書の続編。

・周琇環ほか（編）『韓戦反共義士訪談録』（國史館）【台湾】

本書は台湾で「反共義士」と称される朝鮮戦争参戦者に対するインタヴュー集。巨済島での中国大陸への帰還を求める者との激しい対立の記憶のみならず、彼らのみた朝鮮戦争の実態も語られている。

・程紹昆・黄継陽『美軍戦俘――朝鮮戦争火線紀事』（華芸出版社）

朝鮮戦争中の米軍捕虜を中心とする国連軍捕虜の収容実態と中国側の捕虜の扱い、また国連軍捕虜のその後が描かれる。中国がいかに人道的かつ適切に捕虜を遇したかが強調されている。

・程紹昆・黄継陽『碧潼風雲録――抗美援朝戦争勝利六〇周年紀事』（華芸出版社）

前書と同様に、朝鮮戦争中の米英軍捕虜収容の状況が描かれる。著者は両名ともに、捕虜管理工作に従事した経歴を有し、とりわけ碧潼捕虜収容所での実際が詳述される。

●二〇一四年

・張明金・劉立勤（主編）『中国人民志願軍歴史上的二十七個軍』（解放軍出版社）

朝鮮戦争に参戦した中国人民志願軍全部隊について、各部隊の沿革、編制や戦歴を解説したもの。中国人民解放軍軍事科学院図書館所蔵史料と、公刊出版物を基に、不同がある場合は前者を基準にしたとされる。

・斎紅・朱進編著『抗美援朝紀念館故事』（南京出版社）

「中国紀念館故事叢書」の一冊として出版されたもので、多くの写真とともにさまざまな戦役のエピソード等が記されている。丹東市にある「抗美援朝紀念館」の所蔵品に関わる記述もある。一次資料として扱うことはできないが、「紀実文学」とは趣を異にしており、一定程度の資料的価値を有すると考えられる。

・宋群基（主編）『鮮血凝成的中朝友誼故事』（南京出版社）

前掲書と同じく「中国紀念館故事叢書」の一冊。前掲書が戦役についての記述であったのに対して、本書は主として戦争中の中朝間のさまざまな交流エピソード等が記されている。また「抗美援朝紀念館」所蔵品についての解説も含まれており興味深い。

●二〇一五年

・関捷・関霄漢『鉄血軍魂　一八〇師在朝鮮』（現代出版社）

一九五一年三月に入朝し、翌月からの第五次戦役に投入された中国人民志願軍第六〇軍第一八〇師団は、五月の同戦役第二段階で国連軍に包囲され、この包囲を突破できたのは師団長以下四千名近くといわれる。同師団の兵員は九千名余りであったとされているので、半数以上の損害を出したことになり、朝鮮戦争における「空前の重大な損失」とされる。新聞記者である著者が、「全滅師団」等さまざまないわれ方をされてきた同師団の参戦経験者を取材し、その実態を明らかにしようとしたもの。一般に伝わるうわさや伝聞等を正そうという意図があるため、全体に同師団を過大に称揚しているが、その重大な損害等については克明に記されている。

［附記］本稿は、平成二三年度から平成二五年度にかけて、慶應義塾大学学事振興資金の援助を受けた共同研究の研究成果の一部である。

（1） 齋徳学『你不了解的抗美援朝戦争』（瀋陽、遼寧人民出版社、二〇一一年）二八〇ページ。

（2） 代表的な中国側の公式出版物には以下のものがある。中国人民解放軍軍事科学院（編）『毛沢東軍事文選　内部本』（北京、中国人民解放軍戦士出版社、一九八一年）。【復刻版、蒼蒼社、一九八五年】。『建国以来毛沢東文稿』第一～四冊（北京、中央文献出版社、一九八七～一九九〇年）。中共中央文献研究室（編）『毛沢東軍事文集』第六巻（北京、軍事科学出版社、中央文献出版社、一九九三年）。中共中央文献研究室（編）『毛沢東文集（一九四九年一〇月～一九五五年一二月）』第六巻（北京、中央文献出版社、一九九三年）。中共中央文献研究室・中国人民解放軍軍事科学院（編）『建国以来毛沢東軍事文稿』上、中巻（北京、軍事科学出版社・中央文献出版社、二〇一〇年）。中共中央文献研究室・中国人民解放軍軍事科学院（編）『周恩来軍事文選』第四巻（北京、人民出版社、一九九七年）。中共中央文献研究室・中央檔案館（編）『建国以来周恩来文稿』第三冊（北京、中央文献出版社、二〇〇八年）。彭徳懐傳記編写組『彭徳懐軍事文選』（北京、中央文献出版社、一九八八年）。

（3） たとえば以下は志願軍の上級指揮官等の回想を軍事史的な観点から収録して英訳したものである。Xiaobing Li, Allan R. Millett, and Bin Yu, translated and edited, *Mao's Generals Remember Korea* (Lawrence, KS: University Press of Kansas, 2001). 本書に採録されている回顧録等を掲記しておく。彭徳懐『彭徳懐自述』（北京、人民出版社、一九八一年）。聶栄臻『聶栄臻回憶録』全三冊（北京、解放軍出版社、一九八四年）。杜平『在志願軍総部』（北京、解放軍出版社、一九八九年）。洪学智『抗美援朝戦争回憶』（北京、解放軍文芸出版社、一九九一年）。徐向前『歴史的回顧』全二冊（北京、解放軍出版社、一九八四、一九八七年）。楊得志『為了和平』（北京、長征出版社、一九八七年）。『楊得志回憶録』（北京、解放軍出版社、一九九三年）。柴成文・趙勇田『板門店談判』（北京、解放軍出版社、一九八九年）。

（4） 中国の歴史研究書籍の奥付には、その書籍の内容に即して「紀実文学」、「報告文学」あるいは、「傳記文学」という表記がある。これらの表記がなされている書籍は、日本では、一般的にルポルタージュやノンフィクションといった著作物に相当する。ただし、中国ではこうした表記が、一般に非公開の史料を用いて著述された書籍に付されるケースが多く、これにより中国が掲げる「公式

な歴史事実」とは区別して、一般への公表を認めている特有の事情があるため、必ずしも日本における理解とは一致しない。朝鮮戦争に関する著作物にもこうした傾向が強く、本稿ではそうした著作物についても、十分な考証の上、朝鮮戦争研究において意義があると判断した著作に関しては、掲載することとした。なお「紀実文学」の研究書籍としての取り扱いに関しては、朱建栄「中国における朝鮮戦争研究」(『中国研究月報』第五一三号、一九九〇年一一月)一三ページでも触れられている。

(5) 牛軍には新潟大学での連続講義に基づいた以下の邦語著作がある。牛軍(真水康樹訳)『冷戦期中国外交の政策決定』(千倉書房、二〇〇七年)。

(6) 二〇〇七年版の英訳は以下の通りである。Shen Zhihua, *Mao, Stalin and the Korean War: Trilateral Communist Relations in the 1950s*, trans. Neil Silver (New York: Routledge, 2010).

(7) 沈志華(編)『朝鮮戦争——俄國檔案館的解密文件』全三冊(台北、中央研究院近代史研究所、二〇〇三年)。

(8) 韓国で発行された一九七一年版の原本は以下の通りである。李範奭『우둔불』(서울、思想社、一九七一년)。原本の書誌情報に関しては、李錫敏の調査に拠る。